

学長式辞

—2010（平成 22）年度入学式—

平成 22 年 4 月 5 日

本日晴れて、平成 22 年度相愛大学入学式に出席された音楽学部、人文学部学生、人間発達学部学および音楽専攻科の新入生皆さん、そしてこの日を心待ちにしてこられたご家族の皆さま、ご入学おめでとうございます。相愛学園長大谷紀美子様ならびに浄土真宗本願寺派総長をはじめ関係各位のご臨席を賜り、平成 22 年度の入学式を挙行できますことは、本学にとりまして誇らしく、大きな喜びであり、教職員ならびに在学生とともに、皆さんが本学の構成員となられたことを心より歓迎いたします。この門出にあたり、所信の一端を述べお祝いの言葉といたします。

大学の目的については、学校教育法の第八十三条に、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」とあります。相愛大学の学則に明記している目的も例外ではありません。しかし、この学校教育法に定める目的の上に、「本学は大乗仏教特に浄土真宗の精神に基づき、宗教的情操を涵養し広く知識を授ける」という目的があります。なぜなら、本学には独特の歴史と誇りがあり、それが建学の精神となっているからであります。

皆さんが今日から入学される相愛大学は、今年、創立 122 周年を

迎える長い歴史と伝統を持つ大学です。相愛大学の設置者である学校法人相愛学園は、1888年（明治21年）に浄土真宗本願寺派21代門主の明如上人が、鎌倉時代の日本仏教を代表する宗教者であった親鸞聖人のみ教えに基づいて、大阪本町の本願寺津村別院（北御堂）内に設置された相愛女学校を起源とし、女子に対する学芸の教授と宗教的情操の涵養を目的といたしました。本学の校名「相愛」は建学の精神を表すものであり、その由来は「當相敬愛（まさに、あい敬愛すべし）」という言葉にあります。これは大乘仏教の代表的な経典・仏説無量寿経からとられたもので、「自らを愛するように他者をも相敬える」という意味であります。

1906年（明治39年）には、相愛女学校を相愛高等女学校に改めるとともに、相愛女子音楽学校が増設されました。現在の音楽学部の淵源であり、私立の音楽学校としてはきわめて早い時期の開設でありました。以後、幾多の変遷を経た後、1958年（昭和33年）には相愛女子大学音楽学部が設置され、初代音楽部長には、わが国において西洋音楽の普及に努め、童謡「赤とんぼ」などで有名な山田耕筰が就任し、またこの年には学園創立70周年の記念行事の一環として、山田耕筰の作曲になる「相愛学園歌」が完成しています。「生駒山みどりすがしく…」と始まる美しい学園歌は、「當相敬愛」のすばらしい建学の精神とともに、同窓生・在学生の誇りであります。

1982年（昭和57年）には校名を相愛大学と改め、男女共学の音楽学部を設置しました。その後本町学舎からこの南港キャンパスに移

転し、1984年（昭和59年）には人文学部、そして2006年（平成18年）には人間発達学部を設置し、現在の3学部体制となっています。一昨年、平成20（2008）年には相愛学園は創立120周年を迎え、この120周年を「新たなる始まり」として、相愛をさらに光り輝く未来へ導くための諸事業を計画しているところであります。

「當相敬愛」という建学の精神は、ますます輝きをもって本学の理念として継承され、研究・教育・社会貢献のあり方を方向づけております。本学に今も脈々と流れる自由で思い遣りに満ちた気風は、本学の生い立ちと無関係ではありません。

親鸞聖人のみ教えを中心とした宗教的情操教育を教育の中心にしている本学は、国公立大学のなかにおいてユニークな学園であり尊いことであります。いわば教育に筋が一本通っているといえましょう。私たちの兄弟学園は京都の龍谷大学、京都女子大学をはじめ全国に27校あります。

以上、本学の歴史と設立の経緯をお話しましたが、歴史というのは実に重みのあるもので、それを学ぶことはきわめて大切なことです。歴史は、単に過去の歩みを知ることだけではなく、現在を考え、そして未来の方向を見定めるのに有益だからであります。イギリスの歴史学者であり政治学者でもあったE. H. カークという方に、「歴史とは過去と現在との対話である」という有名なことばがありますが、この対話こそが人間が自身のことを内省し、人間の叡智を生み出す源となるのです。本学の歴史を顧みるとき、先人たちの先覚性に驚嘆すると同時に、理想の実現に向かう、その行動力に感動

せずにはおられません。その感動は、ともすれば現状に安んじて惰性に流れがちな心に新たな活力を与えてくれます。皆さんには相愛大学のユニークな歴史と建学の精神を誇りに思っていたいただきたい。これが申し上げたい第一の点であります。

さて、今日の入学式は、本学においてそれぞれの高い志を果たすべく意欲を燃やしている皆さんが一堂に会し、これからの相愛大学での勉学と生活について期するところを再確認する場でもあります。大学生活は人生の中でもっとも自由な生活を享受できる稀有な時期であり、これまでの受験勉強から解放され、自らの可能性を探ることのできる非常に恵まれた期間です。それだけに、これからの在学期間をどのように過ごすかが、皆さんの今後の人生を左右するといっても過言ではありません。常に初心に帰り、いまの緊張と意気込みと謙虚さを忘れないようにして、悔いのない学生生活を送っていただきたいと思います。そのために最低限、心していただきたい事柄がいくつかありますが、今日はそのうちの三つについてお話いたします。

まず一つ目は、先ほど申しました「自由」ということについてあります。皆さんは、これまでのどちらかといえば他律的な自己を捨てて、自律的な自己（自分で自分を律することのできる自己）をこれからの大学生活において確立する努力をしてください。これまでの中学・高校生活と違い、大学生活においては自由を謳歌することができますが、ところで、自由とはいったい何でしょうか。自由

とは「自らに由（よ）る」と書きます。拠るべき自分がたよりない自分であれば、他人や権威に追従する自分でしかありません。また、エゴイズムに満ちた自分であるならば、その自分の自由は他人の自由とぶつかり、お互いに不自由になります。

孔子や釈尊やイエス・キリストなど、今から2000年以上前に生きた人たちが私たちの人生に今なお意味と方向を与えてくれるのは、その教えに真理の言葉があるからです。釈尊が入滅されようとするとき、弟子たちは釈尊が亡くなられたあと、誰をたよりにしたらよいだろうかと心配しました。そのことに気づかれて釈尊は、「自らを灯明とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、真理（法）を灯明とし、真理をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」と語られたといえます。釈尊の遺言として伝えられる、「自灯明、法灯明」の教えとして有名な言葉です。

私たちはややもすれば他人の言ったことに左右されがちです。とくに権威に追随して、自分で考え、自分で何が正しいかを見定めようとしない傾向があります。他人の言葉を鵜呑みにしてたよるのでなく、何が正しいかを判断できる自分を確立してゆくことが大切であることを「自らを灯明（ともしび）とせよ」と教えられたのです。それでは何を根拠として正しい判断をすればいいかという、釈尊は「法を灯明（ともしび）とせよ」教えられました。法とは真理、物事の本当のあり方のことです。最初に私たちは正面の、車輪のような、あるいは船を操縦する操舵輪のようなものに向かって礼

拝いたしました。実はこれは「法輪」といって、仏の真理・教えのシンボルを表したものです。だから、私たちはこの法輪を尊び礼拝するのです。

18世紀のイギリスの歴史家で『ローマ帝国の衰亡史』を著したことで知られるエドワード・ギボンは、その「覚書」のなかで、「すべての人は、二つの教育を受けている。その一つは教師から受ける教育であり、もう一つはもっと重要なもので、自らが自らに与える教育である」と言っています。たしかにそのとおりで、自らの自らに対する教育には、単なる知識学習だけではだめで、それ以上に大切なことは正しい思考力と判断力と実行力であります。

二つ目に申したいことは勉学に対する心構えです。大学における教育や学問の探求について知っていただく必要があります。皆さんがこれまで受けた教育は、学校の先生が教えてくれたことを覚えたり、教科書に書かれた既存の知識を正確に理解したりすることに主眼が置かれてきました。しかし、大学では、皆さんが高校までに受けた教育とは違い、自分の周囲で起こる事柄、あるいは自分が勉強していることについて、疑問を持ち、問いかけ、自分で問題やテーマを見つけ、自分で思考し、結論を導くという主体的な勉学姿勢が要求されます。大学は、そのための学び方や考え方を教えるところであって、単なる知識を授けるところではありません。皆さんはそれぞれ潜在的な能力を秘めています。その能力を十分に引き出して、皆さんのこれからの長い人生に資する教育結果を残すことは大学の

義務であります。しかし、その義務を私たちが果たすことができるか否かは、皆さんのこれからの努力にもかかっている、ということを深く心に刻んでいただきたいと思います。

主体的な勉学には読書が欠かせません。本を読んで心を動かされることは実に楽しいことです。しかし、その楽しみは、受け身な読書態度では味わうことができません。読書は本来積極的な行為で、書物と自分との間に距離を置きながら、著者が問いかけている事柄に対して、読み手として応答するという側面があります。ここでも、先にお話した「対話」が大切となります。読者が想像力を働かせながら著者の精神と対話し、これまでの自らの精神が気づかなかった世界を発見できる喜びは何ものにも変えがたいものです。学問とは、そういうことが喜べる世界です。そうした態度は、皆さんの知識に深みと広がりを与え、観念に過ぎなかったことがより具体性を帯び、創造的な活力や感性、心の豊かさを育んでくれます。豊かな教養を身につけ、自然や生命^{いのち}を大切にするような思いやりのある人間性を練磨することが大学教育の目的のひとつではありますが、教養とは、まさしくそのような勉学態度をとおして涵養されるものであります。幸い、本学には見通しのよい伸びやかな空間で構成された利用しやすい図書館があります。図書館に足しげく通い、読書に励み、自らの可能性を探り、本当に自分が情熱を注ぐことができるものを模索してください。

さて、三つ目は、よき師とよき友を見つけることです。皆さんは

すでに、この相愛大学に入学した以上、これから勉学を志そうとして
います。本学を選択され、合格を果たすに至るまでのそれぞれの
経緯は、もはや問題ではありません。皆さんはいまここに、勉学に
専念する覚悟を持って同じスタートラインについたのであります。
そのうえで、二つの要点が述べたいと思います。

第一は指導者を選ぶことです。よき師に出会うためには、まず、
誰が自分にとってよき師であるかを判断する力が、求める側になけ
ればなりません。それには、平素から求める姿勢と感じ取る力がなく
てはなりません。また、人との出会いを大切にすることがなく
てはなりません。本学は多くの優れた教員を擁し、それぞれの分野
で活躍されています。しかし、皆さんの個性と要求はそれぞれに違
いますので、それに適った師を見つけなければなりません。どの先
生も学生諸君の質問に大歓迎で応対してくれるはずです。授業の場
で、あるいは研究室を訪れて、どしどし質問してください。そして、
皆さんの能力を引き出してくれる師を得たからには、師のすべての
よさを吸収してください。

第二は友人の選択です。青年期においてよき友人を得ることは大
切なことです。友人との関係を通じて、自分の個性のあり方を自覚
するとともに、自分とは異なる生き方を理解し、価値判断を学ぶこ
とができます。多くの先輩方は、大学で生涯の親友を得ています。
皆さんも、初心を貫くうえで励みとなり、自己の向上にプラスとな
るような友人を得て、お互いに競い合い磨き合って、生涯の友とな

るよき友と親しんでくださることを願っています。大学は教育の場であると同時に、広い意味での文化を体験する場でもあります。その場の一つとして、本学では勉学のみならず、課外活動への参加を奨励しています。課外活動に参加することをとおして、同窓生や先輩・後輩との人間関係を学び、リーダーシップを身につけ、いろいろな課題を解決する過程で総合的な判断力を学ぶことができます。

21世紀の世界と社会はますますグローバル化が進むとともに、価値観が多様化し、競争が激化していくことでしょう。そうしたなかにあって、皆さんには、基本的な専門知識を修得することに加えて、総合的な判断力と豊かな人間性を備え、社会に積極的に参加し、すべての他者の存在に配慮することのできる人に育っていただきたい。それができたなら、當相敬愛を実践できたということになるでしょう。そして、卒業後には、それぞれの職場でリーダーシップを発揮していただきたく思います。そのための練磨の場がこれからの学園生活であります。有意義な学生生活を始められることを念願して、私の式辞を閉じることにいたします。

本日はまことにおめでとうございました。

以上